

Title	福沢諭吉の「コルリ」（カレー）をめぐって
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	阪大日本語研究. 2020, 32, p. 25-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76117
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

福沢諭吉の「コ_ルリ」(カレー)をめぐって

On the alleged introduction of *curry* to Japan by Fukuzawa Yukichi

田野村 忠温
TANOMURA Tadaharu

キーワード：福沢諭吉、『増訂華英通語』、「コ_ルリ」、カレー、curry

要旨

福沢諭吉編訳『増訂華英通語』(1860(万延1)年)の語彙集にカレーの項目が含まれ、curryの発音が「コ_ルリ」と記されているという事実が多くの人々の短絡的判断を招き、福沢が「カレー」の語を日本に初めて伝えたとする説が——さらには、福沢がカレーを日本に伝えたとか、カレーの調理法を伝えたといった話まで——広く流布している。しかし、『増訂華英通語』の理解を前提として言えば、それらの説はすべて誤っている。ここでは、『増訂華英通語』の「コ_ルリ」の本性を明らかにし——その過程で、同書にカレーが「加兀」と書かれているという話の誤りも明らかになる——、併せて関連するいくつかの問題に考察を加える。

1. はじめに

最近必要が生じて近代における西洋料理のアジアへの伝来について少し調べる中で、「カレー」という語は福沢諭吉によって日本に伝えられたという言説がインターネット上に広く流布していることを知った。しかし、いずれも『増訂華英通語』の断片的な観察の拡大解釈(の反復的引用)にとどまっており、同書を多少詳しく調べた経験からすると理解を正確にし、考察を深める余地がある。

当の俗説はカレーに関わる一般の書籍にも見られるのみならず、専門家の編集した複数の外来語辞典にも同趣旨の記述が見出される。しかも、驚いたことに専門家の記述のほうがインターネット上の言説よりさらに質が悪いという面がある。出版物に関わる問題については最後にまとめて触れることにする。

2. 「コ_{アル}リ」「コ_ルリ」——『増訂華英通語』

福沢諭吉は1860(万延1)年に、中国で出版された英語の語彙文例集である『華英通語』咸

豊5年本（1855（咸豊5）年）¹⁾——福沢が同年に渡米した際にサンフランシスコで購入した——に基づき、中国語の語句、文例には日本語訳、中国語の英語訳には仮名による発音表記を加えるという方法で編んだ『増訂華英通語』を出版した（拙論（2018））。

底本である『華英通語』咸豊5年本に収められた類別語彙集の「炮製類」には次のような項目がある。実際には、「兒」は「倪」と書かれ、「厘」は「尤」に似た略字体で書かれている（拙論（2019））。「112b」は第112葉裏を示す。「60a」なら第60葉表である。

加厘 Curry 加兒厘 (112b)

「加厘」が見出し語、Curryがその英訳として示されており、第3の要素は漢字の広東語での読みに基づく curry の注音である。「兒厘」の下に「合」を添えた表記は、「厘」をそのまま li と読まず、ri と読むということを示す（拙論（2019））。「兒」の前置による r 音の表示は、日本人が「ウ」を使って例えば right の発音を「ウライト」と書くようなものである。

福沢は『増訂華英通語』（60a）で、この curry に「コルリ」という振り仮名を添えてその発音を示している（図1）。

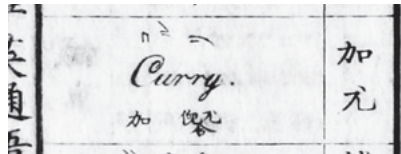


図1 『増訂華英通語』の「加厘」

見出し語の「加厘」に肝心の日本語訳を示していないのは、当時カレーが日本で知られていなかったために発音を示す以上のことができなかったということであるが——巻頭の凡例に“日本にないものや類似のものはあっても関係がはっきりしないものには訳語を与えない”という趣旨の断り書きがある——、「コルリ」という発音についても、実は福沢は英語の発音を知らず、もっぱら綴りに頼って書いている。そのことは、福沢が cut に「コット」、cushion に「コスシヨヌ」、cucumber に「コーコムバル」という読みを与えているという事実を見れば明らかである。福沢が curry の発音を知ってそれを「コルリ」と表記したわけではないのである。

もし福沢がカレーの日本への紹介者だと言うのであれば、福沢はほかにも多くの外国の事物を紹介したことになる。同じ飲食の分野で言えば、例えば、プリン、チーズ、チャウダー、マンゴ、オレンジペコ、ブランデー、シャンパンがそうである。『増訂華英通語』の語彙集には次のような項目があるからである。これらについても見出し語の日本語訳はない。漢字による注

音は省いて示す。

- 布顔 Pudding ポッヂン (60b)
 牛奶餅 Cheese チース (31b)
 魚羹 Chowder チューダ^ル (31b)
 芒果 ^(ママ)Mongo モンゴ (53a)
 上香 ^(ママ)Crange pecco ^(ママ)クレヌジ ペッコ (25b)
 罷蘭地 Brandy ブレヌヂ (33a)
 三辺酒 ^(ママ)Champaigne チャムペーヌ (33b)

mango と orange の綴りの誤りは福沢が『華英通語』を誤読したことによる。pecco と champagne は『華英通語』でもそのように綴られており、過去の綴りのゆれの範囲内に収まる。

要するに、福沢は『華英通語』に収められたこれらの語彙項目にその意味も分からないままに当てずっぽうで発音を書き加えたに過ぎない。福沢がカレーその他の事物を日本に伝えたわけではもちろんないし、まっとうな意味において「カレー」などの語を伝えたと言えるわけでもない。英米各国との交際がすでに始まっていた中国の『華英通語』にたまたま実体不明のカレーやプリン^合の項目があった、ただそれだけのことである。

ちなみに、『華英通語』咸豊5年本におけるカレーの初出は「炮製類」よりずっと前にある「食物類」で、そこには「加厘材料 Curry stuff 加^合厘 時打父」(61a)という項目がある。『増訂華英通語』においても同様であり、福沢は curry stuff に「コ^合ァリ ストフ」という読みを与えている(31b)。したがって、出現順を考慮に入れば、この「コ^合ァリ」が日本における curry のより早い出現であることになる。

3. 「カレイ」——『華英通語』道光本の書き込み

大阪大学附属図書館に、鄭仁山なる人物によって編まれた『華英通語』道光本(1849(道光29)年)がある。筆者の分析と推定によれば、『華英通語』咸豊5年本の基礎とされた英語学習書であり、複数の版の出された『華英通語』の最初の版である(拙論(2018))。その現存は大阪大学蔵本以外には知られていない。

『華英通語』道光本の語彙集の「炮製門」におけるカレーの項目は次の通りである。「厘」の字は実際には竹冠を加えた字形で書かれている。同書は咸豊5年本と異なり英語の l と r を区別していないので、見出し語と注音がともに「架厘」で一致している。

架厘 curry 架厘 (15b)

当時カレーはまだ一般の中国人には広く知られてはいなかったであろうが、『華英通語』はアヘン戦争後における西洋との貿易に携わる中国人による実用を想定して編まれたものであり、カレーの項目が設けられたのはそれが西洋人との交際において知っておく価値のある語だとする判断によるものと考えられる。同じ「炮製門」には

架厘鶏 curry fowl 架厘阜炉 (16a)

という項目もあり、そこには「凡有為架厘者加一架厘在先便是」(カレー料理はすべて前に「カレー」を付ければよい) という説明が小字で添えられている。

さて、『華英通語』道光本の大阪大学附属図書館蔵本には、それを使って英語を学んだと見られる日本人によって多数の書き込みがなされている。そして、「架厘」の項目には「カレイ」という発音が記されている (図2)。

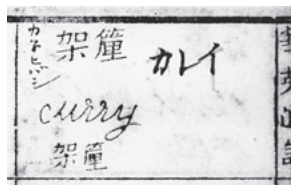


図2 『華英通語』道光本の「架厘」

同書における発音の書き込みは、twelveは「トワル」、outsideは「アツサイ」、grandchildは「グランチウレン」といった具合で、西洋人さもなくば外国で英語を身に付けて帰国した日本人による実際の発音を聞いて書き留めたものであることが確実である。ちなみに、見出し語の「架厘」の左に「カネヒバシ」と書かれているのはおそらく近くにある別の項目との混同による——「架厘」の項目の左下に「鉄耙牛肉 beef steaks 啤乎 士得」という項目があり、「カネヒバシ」は「鉄耙」の説明かと思われる——。

ただし、この書き込みが行われた時期は不詳である。日本では明治維新前後から多くの英語学習書が出版されており、『華英通語』道光本のような内容も不十分で、日本語による説明もない学習書が長く使い続けられたとは考えにくい。とすれば、本書を使って日本人が英語を学んだのは同書の出版された1849 (嘉永2) 年から『増訂華英通語』の出版された1860 (万延1) 年ごろにかけての時期であったと推定されるが、言えるのはそこまでである。

したがって、書き込みと『増訂華英通語』の編集、刊行との前後関係は判定することができない。とは言え、福沢が英語での発音を知らずに書いた「コ_{アル}リ」「コルリ」と異なり現実の英語の発音に基づく「カレイ」という表記は現時点で確かめ得る限りにおいて『華英通語』道光本の書き込みがおそらく最も古い記録であるとは言うことができる。もっとも、「カネヒバシ」という書き込みから分かる通り、この英語学習者もカレーの何たるかを理解していないことは福沢と変わりがない。

4. 「コルリ」「コ_{アル}リ ストフ」の背後事情

4.1. 『華英通語』におけるカレーの項目の来源——西洋人のための広東語学習書

『増訂華英通語』の語彙集の「コルリ」と「コ_{アル}リ ストフ」の項目はいずれも同書の底本である『華英通語』咸豊5年本に由来するが、そこからさらにさかのぼると相異なるところに行き着く。

「コルリ」の項目に対応する『華英通語』咸豊5年本の項目は『華英通語』道光本によっている。そして、道光本の当該の項目は入華米国人宣教師トマス・デバン (Thomas T. Devan) による西洋人のための広東語の入門書 *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)* (1847 (道光27) 年) の次の項目に基づいて書かれている。「黄姜」はターメリック、すなわち、ウコン (鬱金) を表す中国語である。

Turmeric or Curry 黄姜 Wóng kaung (37頁)

他方、「コ_{アル}リ ストフ」の項目に対応する『華英通語』咸豊5年本の項目は道光本にはない。それは、やはり広東語の学習書である米国人宣教師イライジャ・コールマン・ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman) の *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* (1841 (道光21) 年) に挙げられた次の文例から斜体字で印刷された要素を抽出することによって作られている。この後にある中国語文の発音表記は省いて引用する。以後、引用文中の下線は筆者の付加による。

Curry stuff may be used for seasoning. (味付けにはカレー材料を使うことができる。) 黄姜材料
 弁菜 (162頁)

この文例から、curry stuff、すなわち、「コ_{アル}リ ストフ」は「黄姜材料」と訳されてはいる

が、現代人の考えるカレーの材料——肉や野菜の具材を含む——ではなく、もっぱらカレーの調味料、すなわち、カレー粉の類を指していたことが分かる。

なお、『華英通語』道光本、咸豊5年本は、デバンとブリッジマンの語学書の利用に際して「黄姜」を「架厘」「加厘」に書き換えている。これは、19世紀中葉の中国におけるカレーの名称の意識から音訳への転換の反映である（拙論（2020））。

4.2. 広東語学習書へのカレー記載の背景——英国、米国におけるカレーの流行

デバンやブリッジマンが元来インドの料理であるカレーの話をも語学書に含めた背景も考察に値する。

Oxford English Dictionary (OED) 第2版 (1989) を見れば、英語における *curry* の語の出現は少なくとも1598年にさかのぼり、当初は *carriil*、*carrees*、*currey* などの綴りも使われていたことが分かる。

Google Books などを使って調べてみると、さらに多くのことを確かめることができる。世界各地の貿易品について解説した *The World's Commercial Products* (London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1725) には *curry powder* という表現が2か所に現れる。その1つは *turmeric* の項目におけるもので、次のように説明されている。

Besides being used as a dye it is an important ingredient of various condiments, especially curry powder, ... (染料として使われるほか、各種の香辛調味料、特にカレー粉の重要な材料でもある。)

もう1つは *fenugreek*、フェヌグリークの項目である。

The seeds of the common fenugreek are largely used as a condiment in India, and in the manufacture of curry powder. (種子は主にインドで香辛料として使われ、また、カレー粉の製造に使われる。)

ここでの *manufacture* という語の使用から、香辛料の原料を挽いて調合する手間を省けるカレー粉の製法が当時すでに産業化されていたことが知られる。OED に引かれた初期の用例はインドの食習慣の記述であるが、その後遅くとも18世紀初期までにはカレーが英国の食文化に相当浸透していたことになる。

19世紀に入ると、英米各国の多くの料理書や家事指南書にカレー粉やカレー料理の作り

方が書かれるようになる²⁾。そして、同世紀中葉にはカレーが大流行の様相を呈したことが、*Modern Domestic Cookery: Based on the Well-Known Work of Mrs. Rundell* (London: John Murray, 1851)——1806年に出版され、その後版を重ねた Maria Eliza Rundell *A New System of Domestic Cookery* (London: John Murray) に基づく料理書——における次のような記述から知られる。

Curry, which was formerly a dish almost exclusively for the table of those who had made a long residence in India, is now so completely naturalized, that few dinners are thought complete unless there is one on the table; ... (カレーは以前はインド長期滞在経験者だけの料理だったが、今やすっかり英国に定着し、満足な食事には何らかのカレー料理が要ると思われるほどだ。)

図3は英国の雑誌 *Allen's Indian Mail*, Vol. 8, No. 153 (London: Wm. H. Allen & Co., 1850) に掲載されたカレー粉の広告である。



図3 カレー粉の雑誌広告

19世紀中葉に出版されたデバンやブリッジマンの広東語学習書におけるカレーの出現はそうした英米の食事情を背景とするものとして理解することができる。そして、それらよりもやや時代の下る広東語学習書である Nicholas Belfield Dennys *A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language* (1874 (同治13)年)における次の記述からは、遅くとも1870年代までには西洋人と接する境遇にある中国人にとってはカレーが周知のものとなったことが知られる。

PI TSAU 啤酒 like many other compounds, such as KA LI 咖喱 *curry*, KA FEI 咖啡 *coffee* &c. are bastard words intended to express the foreign sound of the article named. Several such words are unavoidably introduced in these exercises, on account of their being current amongst native servants. (ビール、カレー、コーヒーを表す pitsau (= beer 酒)、kali、kafeiなどは原語の音を模した奇妙な外来語であるが、中国現地の使用人のあいだで通

用しているのでここでもその種の語を文例に含めないわけにはいかない。)

5. 出版物における記述とその問題点

5.1. 一般書

福沢諭吉が『増訂華英通語』で実体不明の curry に分からないままに「コルリ」の読みを書き添えたという事実から、福沢が「カレー」の語を日本に伝えたという話への拡大解釈は一般の書籍にも見られる。そして、そこからさらに福沢がカレー自体やその調理法を紹介したというところまで話が広がっていくこともインターネットの場合と共通である³⁾。

誤った知識の発信は社会にとって迷惑な行為であるが、言語の研究に従事しない人々の無理解や思い込みに基づく発言は如何ともしがたい。カレーに関する俗説の流布を支えているのは大多数の場合において素朴な雑学的好奇心であり、容易に理解でき話題性のある話に好んで飛びつく性癖であろう。せめて日本の近代化に対する福沢の貢献を顕彰したいと考えている人には、評価に値しないことまで賞賛するのはかえって逆効果になるということが理解されることを願いたい。

5.2. 外来語辞典

しかし、福沢が「カレー」の語を伝えたという話は名の知られた専門家たちの編んだ外来語辞典にも、それも、明確に誤った形で現れる。

荒川(1941)の「カレー」の項目は次のように記述されている。引用から分かる通り、語形の異なる「カリー」は別項目とされている。

カレー [(*Tamil kari* >) E curry] 【食】=カリー。〔=姜黄, 胡椒, 生姜, にんにくなどで造つた調味料。一岡倉:新英和〕〔curry 加兀—1860, 華英通語〕

荒川はここで、『増訂華英通語』に「カレー」という語形、音形の用例があるという話にしてしまっている。少なくとも、そのように読める記述になっている。荒川は「尤」に似た「厘」の略字体(図1)が何の字か分からず、字形の類似から「兀」だと考え、それが「レー」の音を表しているはずだと思ったのであろう——実際には「兀」の読みはコツ、ゴツなどである——。すなわち、「カレー」とは読みようのない「加兀」を想像に頼って「カレー」の用例に仕立て上げたということである。

しかも、漢字や読みの誤解以前に、「加厘」はそもそも福沢が書いたものではなく、中国の出

版物である『華英通語』咸豊5年本の語彙集に記された見出し語であり——今も中国語ではカレーは多く「咖喱」と書かれる——、それを日本語の外来語として扱うところからして誤っている。

『増訂華英通語』の“用例”を荒川の辞典に書くのであれば、正しくは次のような項目としなければならなかった。

コルリ【食】=カリー, カレー, コ_ァルリ. [curry コルリ—1860, 増訂華英通語]⁴⁾

古い時代に編まれた1冊の外来語辞典の記述に誤りがあるというだけならさしたる問題でもない。しかし、荒川(1941)における「加兀」の記述は荒川が後に編集した外来語辞典(荒川(1967)など)で繰り返されるのみならず、ほかの編者による外来語辞典でも使われ、新たな問題を生じている。榎垣編(1966)は次のように書いている。

カレー【英curry <_カ kari】㊦(食品)①(コリアンダー・こしょう・しょうが・にんにくなど多数の香料で作った)調味料の一種. カレー粉. 「加兀(カレ)」福沢諭吉『増訂華英通語』1860. ㊦ ②カレー-ライス. ㊦

明らかに荒川の辞典に基づく記述であるが——荒川における岡倉編(1929)からの引用を改変し、そこに含まれていた「黄姜」、すなわち、ターメリック、ウコンを別物の「コリアンダー」に置き換えている——、ここでは問題がさらに拡大している。すなわち、榎垣はあたかも『増訂華英通語』で「加兀」に「カレー」の読みが与えられているかのように書いている。しかし、すでに見た通り、福沢はcurryに「コ_ァルリ」「コルリ」という読みを加えたのであって、中国語の「加厘」には注釈を加えていない。榎垣は荒川の誤った記述を信用して「加兀」は「カレー」と読むものと解釈したのであろうが、2人の軽率の相乗効果が事実からのさらなる乖離を生んだということである。

石綿編(1990)は「はじめに」で、辞書作成に際して榎垣編(1966)を「作業台帳」として使ったが「内容は一語一語徹底的、全面的に書き改めた」と言う。しかし、「カレー」の項目では榎垣編(1966)の誤った用例がそのまま引き継がれている⁵⁾。

カレー【英curry】(食品)①調味料のひとつ。カレー粉。㊦「加兀(カレ)」福沢諭吉『増訂華英通語』1860. ㊦ ②カレー-ライス。㊦

結局、荒川は『華英通語』の見出し語である「加厘」を日本語の外来語と誤認し、しかも、それを「加兀」と誤読したうえで、想像に頼って「カレー」と読んだ、そして、楳垣はその「加兀」に資料に書かれてもいない「カレー」という表記を書き加え、一語一語徹底的に書き改めたはずの石綿もそれを踏襲したということである。このようなことでは、同じく受け売りの多いインターネットや一般書の書き手が Curry と「コルリ」だけを見て、理解できないほかの部分を一切無視して語っているほうがはるかに学術的に健全であるとさえ言える⁶⁾。

6. おわりに

『増訂華英通語』の「コルリ」に関わる俗説を出発点とし、「コルリ」の正確な理解について述べるとともに、関連するいくつかの問題について述べた。

各種の資料の複合的な観察により、単一の資料の観察では分からないことが見えてくる。『増訂華英通語』の理解はその底本である『華英通語』の理解が前提になることは言うまでもない。『華英通語』道光本や『華英通語』咸豊5年本は日本と欧米にごくわずかに残存するだけで、従来容易に接することができなかつた。近々関西大学出版部から出版される影印本⁷⁾はさまざまな考察に役立つであろう。

注

- 1) 『華英通語』咸豊5年本の作者は詳らかではない。何紫庭を名乗る人物によって書かれた序文は同書の子卿なる人物の作とするが、何紫庭、子卿ともに仮名であった可能性がある。
- 2) 数例を挙げれば、Mrs. Hudson and Mrs. Donat *The New Practice of Cookery, Pastry, Baking, and Preserving: Being the Country Housewife's Best Friend* (Edinburgh: Printed by J. Moir, 1804)、*Culina Famulatrix Medicinae: Or, Receipts in Modern Cookery with a Medical Commentary* (London: J. Mawman and York: T. Wilson and R. Spence, 1810)、Mrs. William Parkes *Domestic Duties; Or, Instructions to Young Married Ladies* (New York: Printed by J. & J. Harper, 1829)、Robert Huish *The Female's Friend, and General Domestic Adviser* (London: George Virtue, 1837)、Mary Randolph *The Virginia Housewife: Or, Methodical Cook* (Baltimore: Plaskitt, Fite & Co., 1838) などがある。
- 3) 例えば、小菅桂子『カレーライスの誕生』(講談社、2002年)は、福沢が「カレーとはなにかを知っていたかどうかは明らかでないが」と断りつつ、しかし、「カレーをいちはやく紹介したところにも、彼の先進性がうかがえる」と述べている。『増訂華英通語』にカレーの項目があるのは『華英通語』咸豊5年本にそれがあつたからに過ぎず——福沢は『華英通語』の内容をほぼそのまま複製して使っている——、福沢の先進性とは何らの関係もない。

また、安達巖『日本食物文化の起源』(自由国民社、1981年)は、カレーは「フェネグリシード、コリアンダーシード、とうがらし、こしょう、しょうが、にんにく、みかんの皮などを適宜に配合したものであつ

て、福沢諭吉の『華英通信』(一八六〇—万延元年)もこれをカレー (curry) として正確に紹介している」と述べ、大石学監修『最強!日本の歴史人物100人のひみつ』(学研プラス、2007年)はさらに話をふくらませて福沢が「今の日本ではだれもが知っているカレーライスの「カレー」について、アメリカから帰国して出版した和英辞典で調理法を紹介している」と書いている。

- 4) 荒川(1941)は「カレー」以外の項目でも『増訂華英通語』の“用例”を引いており、いくつもの項目に同様の問題がある。
- 5) 実際に「作業台帳」とされたのは榎垣編(1966)の増補版(1972年)であるが、「カレー」の項目は初版と増補版とで共通である。
- 6) インターネットや一般書のすべての記述がそのような意味で“健全”だと言えるわけではない。福沢が『増訂華英通語』でカレーを「加兀」として日本に紹介したという話は、塚田孝雄『食悦奇譚—東西味の五千年—』(時事通信社、1995年)、宮地哉恵子「資料で見るカレーと日本人—出会いと定着—(上)」(『日本古書通信』第853号、2000年)、佐々木繁明他編『続OCOLGY』(オタフクソース、2001年)などにも見られる。
- 7) 『華英通語』の初期3版およびそれらの原点となっているロバート・トーム(Robert Thom)『華英通用雑話』(1843年)の影印を収める。

参考文献

- 荒川惣兵衛(1941)『外来語辞典』(富山房)
- 荒川惣兵衛(1967)『角川外来語辞典』(角川書店)
- 石綿敏雄編(1990)『基本外来語辞典』(東京堂出版)
- 榎垣実編(1966)『外来語辞典』(東京堂出版)
- 岡倉由三郎編(1929)『新英和大辞典』(研究社)
- 田野村忠温(2018)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
- 田野村忠温(2019)「中国初期英語学習書における英語発音の漢字表記—流音の知覚と表記—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第59巻
- 田野村忠温(2020)「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』第38号